

ライバルが身近にいる環境が成長につながっています

小西 憂 LB

パナソニック株式会社
エレクトリックワークス社
ライティング事業部勤務



Xリーグの強豪、パナソニックインパルスはどんなチームなのか。選手やスタッフが生時代を抱いていた印象と、一員になってから体験した実際の姿、そしてインパルスであることの意義を語る。2021年シーズンに新人ながらLBとスペシャルチームのすべてのユニットで先発の座を勝ち取ったLB小西憂(桃山学院大学)は、高校時代からインパルスに憧れていたという。

——大学生の時、小西さんはパナソニックインパルスというチームにどんな印象を持っていましたか？

小西 私にとってインパルスは高校生の頃からの憧れのチームであり、入部することが夢でした。

高校2年の春に前十字靭帯を断裂してしまった時、やる気を失ってしまった時期がありました。当時はレシーバーだったのですが、負傷の影響でスピードが落ちてしまいました。思い切りプレーできない状況が続いて「もうフットボールは辞めてもいいかな」と、思っていた時に、インパル

スと立命館大学のライスボウルを観て、めちゃめちゃカッコいいと思ったんです。

——インパルスのどんなところに惹かれたのですか？

小西 Xリーグの他のチームの試合も観たことはありましたが、社会人の選手はセレブレーションを派手にする方が多いという印象を持っていました。しかし、インパルスの選手の黙々と誠実にプレーしている姿が、とても格好良く見えました。すごいプレーをしてもじゃがずに、「こんなのは当たり前」といった堂々とした姿に、自分もそつなりたいと思いました。

ポジションを替えて大学でフットボールを続けようと思いましたが、将来、インパルスの一員になりたいと思っただけでした。

大学時代はOBのDL有村(雄也)さんに、「インパルスに入る」チャンスがあるなら、声をかけてください」と、メールをしていました。幸い機会を得ることができ、インパルスでプレーするという夢を叶えることができました。

——インパルスに入部する前と後で印象が変わったことは？

小西 入部前はめちゃくちゃ硬派というイメージでした。練習も最初から最後までただ真剣にひたむきに、笑顔なんて浮かべずに取り組んでいると思っていました。実際はウォーミングアップの時などはリラックスしていて、ワイワイと楽しい雰囲気だったのには驚きました。しかし、プレーが始まると、瞬時に真剣モードに入ります。「さっきまで笑ってましたよね？」と、オンとオフの切り替えの早さには驚くと同時に、やっぱりインパルスはすごいチームだなと思いました。

——インパルスは仕事とフットボールの両立を前提にしているチームですが、仕事においてはどうか考えていましたか？

小西 私の場合、インパルスでプレーするという夢を叶えることが第一で、夢が叶うのであればどのような仕事でも頑張りたいと考えていました。先輩方から話を聞いて人の暮らしに関わる照明の仕事をしたと聞いていました。今、配属されている部署

は舞台照明など、エンタテインメントを演出する照明システムを扱う仕事です。希望とは少し違う部署でしたが、とてもやりがいを感じています。——どんなところにやりがいを感じていますか？

小西 インパルスの選手であっても区別せず、責任のある仕事を任せていただけることです。特に私の部署は比較的新しい部署で、会社としてもこれから開拓していく分野です。新しいことにチャレンジをさせてもらえることはとても楽しいです。入社1ヶ月ぐらいの時期に、展示会で商品説明をする役割を任された時はびっくりしましたが(笑)、任せていただいたからには頑張らねばという気持ちで一生懸命商品について勉強しました。他の社員の方とまったく同じく、ビジネス・パーソンとしての経験を積ませていただける環境は、とても恵まれていると思います。

また、専門的な市場を相手にビジネスをする部署なので、社内でも知識を持った人が限られています。また、扱う商品も多岐にわたるので、

様々な部署が扱う商品の知識を持っていないかもしれません。ちょうどランとパス、両方を守るために両方の知識が必要なLBとよく似た役割なのも、やりがいを感じている一つの要素になっています。それに、舞台照明のリハーサルを拝見する機会もあるのですが、「凄い世界に関わっているんだな」と実感できます。

——小西さんは昨シーズン、守備だけでなくスペシャルチームでもすべてのカテゴリで先発にられました。どんな気持ちで取り組みましたか？

小西 私の出身校である桃山学院大学はディビジョン1と2を行ったりきたりしているチームでした。同じLBには同期、先輩を問わず大学のトップチーム出身のエリートがたくさんいます。そんなチームメイトたちと自分のレベルを客観的に比べてみた時、私自身は差を感じていました。試合に出場するために、LBとしてだけでなく、出場できるチャンスはすべてものにしてやろうと考えました。まずは「同期に負けたくない」という気持ちから始めて、試合に出場する機会を得られたら「LBの中で一番になりたい」という目標になり、最終的には「すべてのポジションで一番になりたい」とどんどん目標が上方修正されていった感じです。

同期と同じポジションの青根(葉太/関西大)と、RB立川(玄明/立命館大)はライバルとして特に意識しています。青根は身長、体重もほぼ同じなので、プレーはもちろん、トレーニングから絶対に負けたくないと思って取り組んでいます。また、プレーや仕事への取り組み方、社会人として

の姿勢など、尊敬できるところもたくさんあるので、学ばせてもらっている部分もたくさんあります。大学時代は学年が上がるにつれて自分がチームの中で一番であることが多く、身近に競い合う相手がいまいませんでした。身近にライバルがいるということ

は、「負けたくない」、「頑張ろう」というモチベーションになると同時に、身近に自分と似たレベルの手下があるということなんだと、インパルスの一員になって実感しています。——2022年シーズンの目標を教えてください。

小西 自分らしさを生かして存在感を發揮したいと思っています。昨年はLBの中でポジションを転々としたのですが、一つのポジションで絶対的な地位を確立したいと思っています。また、「チームに勢いをもたらす

プレーをする」ことは、常に目指していますが、昨年はたかさんのポジションで出場機会があったにも関わらず自分自身も納得できるようなビッグプレーはできませんでした。自分の持ち味は激しさや、どんな相手にも臆せず向かっていけることだと思っています。練習からハードなプレーを心がけてビッグプレーを起こ

りたいと思っています。



Yu Konishi

こにし・ゆう。1999年1月5日生。小学6年時に少年フットボールチーム「住吉川86スコピオン」でフットボールを始める。中学時代は大ベンガルズでプレー。大阪学芸高校ではWRからOL/LBに転向。桃山学院大2年時の2018年にU19世界選手権に日本代表として出場。ルーキーイヤーの昨年は13タックル1QBサック2ロスタックルを記録。



パナソニック インパルス 検索

panasonic.co.jp/ew/go-go-impulse/



Facebook
www.facebook.com/
Panasonic.Impulse

Twitter
@gogo_impulse